

# 保育士養成課程の学生に対する英語学習 に関する調査 – English for Specific Purposes (ESP) の視点から –

## English for Specific Purposes (ESP) for Students of Early-Childhood Education: Focus on Needs Analysis

カレイラ松崎順子 (かれいら まつざき じゅんこ)

東京未来大学

English for specific purposes (ESP) is suggested here as one possible direction in English education programmes for prospective nursery school teachers. ESP refers to the teaching of English as it relates to a particular field of study as needed by a specific group of students. In Japan, several studies on ESP (e.g., Terauchi, 2005; Hashimoto, 2000; Miyama, 2000; Yamazaki, 2000; Yoshida, 2000; Sasajima, 2000) have been conducted. This paper further contributes to the ESP literature by focusing on the specific English language needs of students studying to become nursery teachers. Because the number of foreign children at Japanese nursery schools is increasing, nursery school teachers are more likely to be placed in situations where they have to communicate with foreign children and their parents using English (Osuka, 2006). Therefore, as part of this study, a needs analysis was carried out in order to develop a curriculum introducing ESP into the study of early-childhood education.

The participants in this study were 52 freshmen majoring in early-childhood education at a private college. The materials used in this study were four questionnaires on preferred English learning styles, based on Kikuchi (2005), desired English skills

at college, based on Hayasaka (1995), desired English lessons at college (Carreira, 2008), and desired English lessons concerning children (Carreira, 2008). Also, open-ended questions were asked.

This paper explored the following research questions:

1. What are the preferred English learning styles of students in early-childhood education? How many clusters can be found?
2. What are the desired English skills of students preparing for a career in early-childhood education? Among the clusters, how different are these desired English skills?
3. What kinds of English lessons do students in early-childhood education programmes want to get? Among the clusters, how different are the English lessons they want to get?
4. What kinds of English lessons concerning the teaching of children do the students in early-childhood education programmes want to get? Among the clusters, how different are these English lessons which students want?

The results revealed that the participants (a) want teachers to use Japanese in English classes, (b) want teachers to correct all their mistakes immediately, (c) want to learn daily conversation in English, (d) want to understand English in movies and television and radio programs and (e) want to get lessons using English movies and English songs for children.

The results can be divided into two groups using cluster analysis: one representing negative attitudes towards English learning and the other representing positive attitudes towards English learning. A Mann-Whitney U test was conducted to compare the scores on all the items between the negative attitudes group and the positive attitudes group. The results showed there were significant differences between the two groups. Whereas the negative attitudes group tended to want to learn English using movies and TV programs, the positive attitudes group tended to want to communicate with native English speakers and practice-teach at nursery schools abroad. Therefore, considering students' needs, ESP courses can be introduced in early-childhood education. Suggestions include lessons using movies and TV programs for children and daily English conversation as required subjects, increased communication with native English speakers and practice-teaching at nursery schools abroad as elective subjects. As a future consideration, we should analyze needs for discourse communities and reveal what kinds of English they need in nursery schools after graduation.

本研究では保育士養成課程におけるESPを取り入れたカリキュラムを開発するために、特に、学習者のニーズに焦点をあて、保育士養成課程の学生が英語教育に対してどのような要望や態度を持っているのかを調査した。調査協力者は、私立大学に属する保育士養成課程52名の1年生である。その結果、本研究に参加した学生は日本語での授業を望んでおり、学生同士で英語を話すようなコミュニケーション活動をあまり好まない傾向にあった。また、誤りをすぐに直してくれることを望んでいるが、一方で、厳しい授業や課題が多い授業は望んでいないことが明らかになった。身につけたいと思っている英語の能力においては、多くの学生が海外に行ったとき

に困らない英語力を身につけたいと思っており、映画やテレビ番組などを使った授業や読解やリスニングのコツを教えてくれる授業を受講したいと思っているようである。さらに、子どもに関係する映画や歌などに興味があることも明らかになった。

また、「消極的」群と「積極的」群の2つのグループに分けた結果、受講したいと思う英語の授業において2つのグループ間にかかなりの差がみられた。特に、英語母語話者と英語でコミュニケーションを行う授業や海外での保育園実習、また試験対策の授業などでその差が顕著であった。

## はじめに

大学英語教育における現在の問題点は、学生が英語教育の重要性は認めているが、その目的がはっきりしないため、漠然とした英語に対する必要性しか感じられなくなっている傾向があり(本岡・川崎, 1999), 学生に英語学習に対する明確な目的を示すことが必要であると思われる。そのような中、英語教育のあり方の一つの方向性として提唱されてきたのがEnglish for Specific Purposes(ESP)である。ESPは「それぞれの学問領域や職域においては固有のニーズが存在し、そのニーズによって同質性が認知され、異質性も生じてくる。そして、異質性が認知された各専門領域内では『ディスコース・コミュニティ』集団が形成され、その目的を達成しようとする。その場合、各集団の内外において明確かつ具体的目標を持って英語が使用される。その際の言語研究および言語教育」(深山編, 2000, p.197)と定義されている。ESPは、言語教育の中心が文学等であることへの反動・反発から1960年代以降に主張されるようになったといわれており、学習者の特定のニーズに合致するように、コース・デザインがなされなければならない(堀口, 2003)。

深山編(2000)はESPのコース・デザインをする際には、ニーズ分析⇒目標設定⇒シラバスおよび教材の作成⇒指導法⇒成績評価⇒コース評価の過程をとるべきであり、ESPを実践するうえで、最初に行わなければならないのがニーズ分析であると述べている。ニーズ分析とはシラバスやカリキュラムを開発する際に言語のニーズについての情報を体系的に集めることである(Richards, 2001; Brown, 1994)。ESPのニーズ分析には①ディスコース・コミュニティのニーズ、②教師・大学のニーズ、③学習者のニーズの3つの領域がある(深山編, 2000)。ディスコース・コミュニティとは「専門家集団と訳され、この集団内で英語が使用される場合、例えば弁護士同士や医者同士のコミュニケーションと、この集団と外の者として英語が使用される場合、例えば患者と患者のコミュニケーションがあげられる」(寺内, 2005, p. 21)。①ディスコース・コミュニティのニーズおよび②教師・大学のニーズは、学習者が目標言語を使う状況を特定しそれに基づいてニーズ分析を行う目標状況分析であり、専門分野の教師や卒業生対象のアンケートなどから、工学系であれば、仕様書・科学雑誌などのジャンルを選び、コースの学習目標を設定する(深山編, 2000)。一方、学習者のニーズは、現状分析であり、学習者の学習スタイルや英語に対する態度などを問う質問紙を実施し、学習者に適切な指導法や学習スタイルなどを決定するのに参考にする(深山編, 2000)。

上述したのは主に大学レベルの英語教育一般に関する分析方法であるが、近年は保育の現場でも国際化が進んでおり、日本の保育園に入園してくる外国人児童の数が増加している。外国人児童の保護者には英語を母語とするものは少なく、群馬県の太田市のようにブラジル人が圧倒的に多い一部の地域もあるが、ほとんどの地域では南米系・アジア系など様々な国籍の児童が在籍している。そのため、保育士が

保護者の話すすべての母語を学習し、コミュニケーションを行うことは不可能である。ゆえに、外国人児童の保護者とのコミュニケーションにおいて国際語である英語が必要になってくる。また、英語教育を行っている保育園や英語で保育を行っている保育園も増加している。このようなことから保育士が英語を使う場が増えてきており、保育士養成課程においてもESP的アプローチを積極的に取り入れることが必要であると考え、本研究を実施した。

### 日本の大学教育におけるESP研究

日本の大学の英語教育においては、様々な分野でESPの研究が行われてきた。ビジネス英語関係では寺内(2005)や橋本(2000)、工学・理学の分野では、深山(2000)や山崎(2000)、また、医学・看護・薬学の分野においては本岡・川崎(1999)、吉田(2000)、笹島(2000)、および神前(2000)、体育専攻課程においては橋口・坂本(2003)がESPに関する研究を行っている。たとえば、本岡・川崎(1999)は看護教育課程における学生の英語学習に対する意識の変化を調査し、専門教育を行うほど英語の必要性に対する認識が低くなっていくことを明らかにし、大学の英語教育において英語教育と専門教育の連携がうまくいっていないことを指摘している。

保育士養成課程におけるESP研究に関しては、大須賀(2006)がESPを取り入れた英語授業の実践報告を行っており、その中で保育士養成課程の英語教育にESPに基づいたアプローチを取り入れることにより、学生の英語学習に対する動機づけを高めることができたと報告している。また、森田(1995, 1997)は保育に関する英語教材開発の報告およびその教材を使用した授業実践の報告を行っている。

### 日本の大学教育におけるニーズ分析

言語教育におけるニーズ分析の研究は1960年代から1970年代にかけてESPの動きを受けて始まったとされる(Richards, 2001)。日本においても、大学の英語教育におけるいくつかのニーズ分析が報告されている。早坂(1995)は身につけたい英語の能力、英語を学ぶ理由についてのニーズ分析を大学1・2年生に行い、海外へ行ったとき、英語で様々な日常的状況に対処できるような英語の能力を身につけることや英語で自分自身の考えや感情について話せるようになることを必要としていることを明らかにした。Kikuchi(2005)は学生および教員にニーズ分析に関する質問紙調査を行った結果、学生は英文和訳が最も効果的な学習方法であると思っているが、教員はあまり効果的であるとは考えていないなど学生と教員との間で英語学習に対する認識に違いがあることを指摘している。その他、Halvorsen (1998)は英語を専攻とする短大生はリーディング、ライティング、リスニング、スピーキングの4技能を学ぶ総合的なクラスを必要としていることを明らかにした。Edwards (1995)は英語を専攻としない大学1・2年生を対象にした調査を行った結果、彼らは資格や就職のために英語を学習する必要があると感じており、海外へ行った時、英語でさまざまな日常的状況に対処できるような英語能力を必要としていることを明らかにした。

### 本研究の目的

保育士養成課程におけるESP研究は大須賀(2006)や森田(1995, 1997)が行っているが、体系的なニーズ分析を行っているわけではない。保育士養成課程におけるニ

ズ分析は今までほとんど行われていないと言ってよい。日本の保育園に通う外国人児童の数が増加していることから外国人児童の保護者とのコミュニケーションにおいて英語が必要な場面も増えている(大須賀,2006)。また、英語教育を行っている保育園や英語で保育を行っている保育園も増加しているため、保育士が子どもたちに英語を教える機会も増えてくるであろう。このような現状の中、保育士養成課程においてもESPを取り入れたカリキュラムを開発する必要があると考え、本稿では特に学習者のニーズに焦点をあて、保育士養成課程の学生が英語教育に対してどのような要望や態度を持っているのかを調査した。すなわち、学生のニーズを踏まえたうえでどのような形でESP的要素を導入していくことができるのかを考察していくことが本研究の目的である。

### 研究課題

1. 保育士養成課程の学生はどのような英語学習のスタイルや好みを持っているのか。また、英語学習のスタイルや好みによってどのようなグループに分類することができるのか。
2. 保育士養成課程の学生はどのような英語の能力を身につけたいと思っているのか。また、それらはグループごとにどのように異なるのか。
3. 保育士養成課程の学生はどのような英語の授業を受講したいと思っているのか。また、それらはグループごとにどのように異なるのか。
4. 保育士養成課程の学生は子どもに関係するどのような英語の授業を受講したいと思っているのか。また、それらはグループごとにどのように異なるのか。

### 研究の方法

#### 調査協力者

調査協力者は、東京の私立のA大学に属する保育士養成課程の1年生で、年齢は18歳から20歳(平均18.50、標準偏差 0.63)であった。英語力レベルは概ね英検3級程度であった。

#### 質問紙

使用した質問紙は調査協力者について「英語学習に対するスタイルと好み」、「卒業までに身に付けたい英語能力」、「受講したい英語の授業」、「子どもに関係する英語の授業」に関する情報を得るために実施した。「英語学習に対するスタイルと好み」はKikuchi(2005)を参考にし、各質問項目が対象となる調査協力者の実態を反映しているかどうか留意しながら、計18項目の尺度を作成した(付録1を参照)。「卒業までに身に付けたい英語能力」は早坂(1995)を参考に計11項目の尺度を作成した(付録2を参照)。「受講したい英語の授業」(付録3を参照)および「子どもに関係する英語の授業」(付録4を参照)はカレイラ(2008)を使用した。「受講したい英語の授業」は計16項目であり、「子どもに関係する英語の授業」は計12項目である。それぞれの項目について4件法(あてはまらない・まあまああてはまる・あまりあてはまらない・あてはまらない)を採用し、判断を求めた。4件法を採用したのは、件数を奇数(5件法など)にすると、あまり考えずに真ん中のカテゴリ「どちらでもない」「中ぐらい」を選ぶ回答者

がいると思われるため(Dörnyei, 2003)である。

さらに、本研究では「どのような英語の授業が受けたいか」「どのような英語を学びたいか」について問う回答記述式項目も設けた。回答記述式項目は表現に自由度があるために、量的なデータよりも豊かなデータを得ることができ、生き生きとした例や説明が自分の言葉で語られ予測していなかった問題を見出すことができる(Dörnyei, 2003)。ゆえに、本研究では回答記述式項目の欄を設けて、量的なデータだけからでは見出すことができない学習者のニーズを探り出すことにした。

### 調査時期

調査時期は2007年6月下旬から7月下旬である。質問項目を全て完了するためにかかった時間は5分から15分程度であった。6月下旬に行った「英語学習に対するスタイルと好み」「卒業までに身に付けたい英語能力」「受講したい英語の授業」の有効回答数は52名(男性18名, 女性34名)であった。7月下旬に行った「子どもに関する英語の授業」は、出席者数が異なったため、有効回答数は42名(男性12名, 女性30名)であった。

### データ分析

上記の質問紙の各項目に対して保育士養成課程の学生がどのような考えを持っているのかをより明確にするため、4段階尺度形式を「あてはまる」「あてはまらない」の2段階に変換し、再集計した上で $\chi^2$ 検定を行った。さらに、保育士養成課程の学生の特徴をより詳細に把握するため、「英語学習に対するスタイルと好み」の18項目をクラスター分析にかけてグループ分けを行い、質問紙のそれぞれの項目においてマン・ホイットニーのU検定を用いて、グループ間の差を明らかにした。

### 結果

#### 保育士養成課程の学生の英語学習に対する態度や要望

最初に上記の4つの研究課題のうち、1.保育士養成課程の学生はどのような英語学習のスタイルや好みを持っているのか、2.どのような英語の能力を身につけたいと思っているのか、3.どのような英語の授業や4.子どもに関する英語の授業を受講したいと思っているのかを $\chi^2$ 検定により検証した。その結果、「英語学習に対するスタイルと好み」(表1を参照)において5%水準で「あてはまる」が有意に多かった項目は、項目2「授業中、ひとりで(ペアやグループではなく)学習すると学習がはかどる」、項目4「授業が教科書にきちんとそっているとよく学習できる」、項目6「先生が日本語で説明をしてくれるとよく学習できる」、項目7「先生がすぐに私の誤りを正しく直してくれるとよい」、項目9「先生が教室を歩き回り、一人一人生徒に指導してくれるのがよい」、項目10「翻訳の練習はためになる」、項目11「言葉をただ耳で聞くだけでなく目で見ると勉強になる」、項目12「ビデオやDVDなどを使って勉強するのが好きだ」、項目18「可能な限り、よい成績をとることは重要だ」であった。一方、5%水準で「あてはまらない」が有意に多かった項目は項目3「先生が厳しく授業をしてくれるとよい」、項目8「コンピュータやインターネットを使って英語を勉強することに興味がある」、項目14「英語の宿題を出してくれたほうがいい」、項目15「他の学習者・学生と英語で話すのが好きだ」であった。

表1 「英語学習に対する学習スタイルと好み」の各項目の $\chi^2$ 検定結果 (N=52)

	4段階尺度を2段階尺度に変換し集計した結果		2段階尺度数に 対する $\chi^2$ 検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
1	21	31	1.92
2	17	35	6.23 *
3	39	13	13.00 **
4	9	43	22.23 **
5	29	23	0.69
6	2	50	44.31 **
7	6	46	30.77 **
8	35	17	6.23 *
9	17	35	6.23 *
10	9	43	22.23 **
11	5	47	33.92 **
12	11	41	17.31 **
13	19	33	3.77
14	34	18	4.92 *
15	44	8	24.92 **
16	30	22	1.23
17	19	33	3.77
18	2	50	44.31 **

\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$

「卒業までに身に付けたい英語能力」(表2を参照)において5%水準で「あてはまる」が有意に多かった項目は、項目1「海外へ行ったとき、英語で様々な日常的状況に対処すること」、項目2「英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること」、項目3「英語の本や雑誌や新聞などを読むこと」、項目4「英語の単語やイディオムをたくさん覚えること」、項目7「英語を日本語に円滑に訳すこと」、項目11「英語のすばらしい発音を身に付けること」であった。一方、5%水準で「あてはまらない」が有意に多かった項目は項目5「英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること」、項目6「英語の専門書や論文を速く効果的に読むこと」であった。

表2. 「卒業までに身に付けたい英語能力」の各項目の $\chi^2$ 検定結果(N=52)

	4段階尺度を2段階尺度に変換し集計した結果		2段階尺度数に 対する $\chi^2$ 検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
1	8	44	24.92 **
2	12	40	15.08 **
3	17	35	6.23 *
4	14	37	10.37 **

	4段階尺度を2段階尺度に変換し集計した結果		2段階尺度数に 対する $\chi^2$ 検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
5	38	14	11.08 **
6	35	17	6.23 *
7	12	40	15.08 **
8	21	31	1.92
9	25	27	0.08
10	20	32	2.77
11	14	38	11.08 **

\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$

「受講したい英語の授業」(表3を参照)において5%水準で「あてはまる」が有意に多かった項目は、項目6「文法をしっかり教えてくれる授業」、項目7「読解のコツを教えてくれる授業」、項目8「リスニングのコツを教えてくれる授業」、項目9「映画やテレビ番組などを使った授業」、項目12「英語の歌で英語を学ぶ」であった。一方、5%水準で「あてはまらない」が有意に多かった項目は、項目2「TOFELテスト対策」、項目14「日本国内での英語村のようなところでの語学研修」であった。

表3. 「受講したい英語の授業」の各項目の $\chi^2$ 検定結果(N =52)

	4段階尺度を2段階尺度に変換し集計した結果		2段階尺度数に 対する $\chi^2$ 検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
1	28	24	0.31
2	34	18	4.92 *
3	31	21	1.92
4	28	24	0.31
5	19	33	3.77
6	18	34	4.92 *
7	10	42	19.69 **
8	12	40	15.08 **
9	10	41	18.84 **
10	24	28	0.31
11	24	27	0.18
12	18	33	4.41 *
13	28	23	0.49
14	32	18	3.92 *
15	26	24	0.08
16	25	25	0.00

\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$



「子どもに関係する英語の授業」(表4を参照)において5%水準で「あてはまる」が有意に多かった項目は、項目5「子ども用の英語の歌をたくさん歌ってみたい」、項目6「子ども用の映画を使った授業を行ってほしい」であった。一方、5%水準で「あてはまらない」が有意に多かった項目は、項目9「英語で折り紙のおりかたを指導してみた」、項目10「英語でお絵かきの指導を行ってみたい」、項目11「英語で工作の指導を行ってみたい」であった。

表4. 「子どもに関係する英語の授業」の各項目の $\chi^2$ 検定結果(N=42)

	4段階尺度を2段階尺度に変換し集計した結果		2段階尺度数に 対する $\chi^2$ 検定結果
	あてはまらない	あてはまる	
1	16	26	2.38
2	19	23	0.38
3	27	15	3.43
4	27	15	3.43
5	13	29	6.10 *
6	12	30	7.71 **
7	20	22	0.10
8	15	27	3.43
9	29	13	6.10 *
10	29	13	6.10 *
11	29	13	6.10 *
12	24	17	1.20

\* $p < .05$ . \*\* $p < .01$

#### 英語学習に対するスタイルや好み異なる学習者群の比較

「英語学習に対するスタイルや好み」の項目合計18変数を用いて、保育士養成課程の学生のグループ分けを行った。平方ユークリッド距離を用いたワード法によるクラスター分析を行った結果、2つのクラスターに弁別できた。第1クラスターには16名、第Ⅱクラスターには36名の調査対象者が含まれていた(図1を参照)。

各クラスターの特徴を調べるため、英語学習に対するスタイルや好みの各項目についてマン・ホイットニーのU検定を行った。ノンパラメトリック法のマン・ホイットニーのU検定を採用したのは、正規性の検定の結果、正規分布しない項目が多かったためである。マン・ホイットニーのU検定(有意水準5%)の結果は表5の通りである。

項目2「授業中、ひとりで(ペアやグループではなく)学習すると学習がはかどる」、項目3「先生が厳しく授業をしてくれるとよい」、項目4「授業が教科書にきちんとそっぴるとよく学習できる」、項目5「先生がテストをしてくれたり、宿題を出してくれるとよく学習できる」、項目8「コンピュータやインターネットを使って英語を勉強することに興味がある」、項目10「翻訳の練習はためになる」、項目13「自分のライティング(筆記)の課題をお互いに直しあうと勉強になる」、項目14「英語の宿題を出してくれたほうがいい」、項目16「海外に長期留学したいと思っている」において第Ⅱクラスターは第

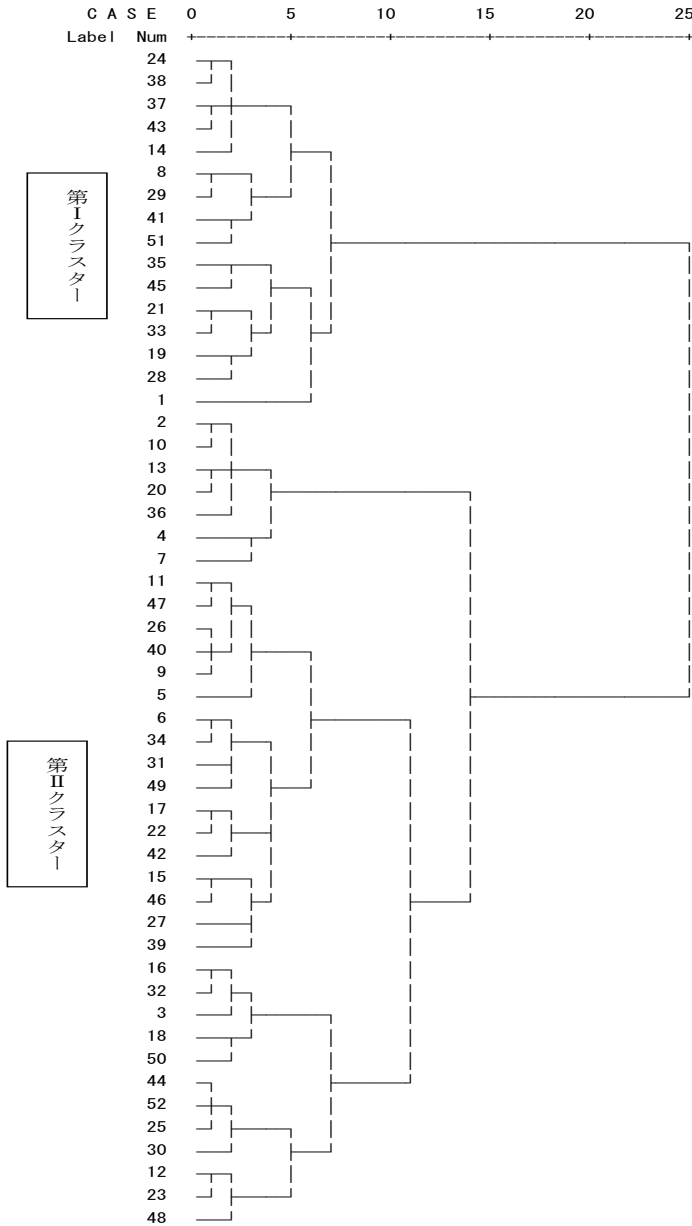


図1 クラスター分析の結果

1 クラスターより有意に点数が高かった。一方、項目17「英語の授業の単位を落としてしまうか心配である」において第1クラスターは第Ⅱクラスターより有意に点数が高かった。第Ⅱクラスターにおいて有意に点数が高かった項目は「先生が厳しく授業をしてくれるとよい」、項目16「海外に長期留学したいと思っている」、項目8「コンピュータやインターネットを使って英語を勉強することに興味がある」など英語学習に積極的な項目が多い。ゆえに、第1クラスターを英語学習者に対する「消極的」群とし、第Ⅱクラスターを「積極的」群とした。

表5. 「英語学習に対する学習スタイルと好み」の各項目の消極的・積極的グループ別の平均値・標準偏差とマン・ホイットニーのU検定の結果

項目	消極的(N = 16)		積極的(N = 36)		マン・ホイットニーのU
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	2.63	1.02	2.44	0.81	254.00
2	1.81	0.66	3.17	0.65	49.50 **
3	1.56	0.51	2.39	0.73	119.50 **
4	2.75	0.86	3.33	0.72	180.00 *
5	1.75	0.58	2.72	0.74	100.00 **
6	3.56	0.51	3.56	0.61	281.00
7	3.56	0.63	3.33	0.72	238.50
8	1.50	0.63	2.53	0.94	114.50 **
9	2.63	1.02	3.03	0.81	229.00
10	2.81	0.83	3.33	0.68	188.00 *
11	3.06	0.68	3.33	0.59	227.00
12	3.19	0.83	3.08	0.77	266.50
13	2.19	0.75	2.86	0.76	158.50 *
14	1.38	0.50	2.58	0.87	78.00 **
15	1.75	0.86	1.78	0.8	278.00
16	1.81	0.91	2.44	1.05	189.50 *
17	3.5	0.73	2.64	1.07	157.00 *
18	3.38	0.62	3.61	0.55	228.00

\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$

次に「卒業までに身に付けたい英語能力」が「消極的」群と「積極的」群においてどのように異なるかを調べるため、各項目についてマン・ホイットニーのU検定(有意水準5%)を行った。その結果は表6の通りである。項目3「英語の本や雑誌や新聞などを読むこと」、項目4「英語の単語やイディオムをたくさん覚えること」、項目7「英語を日本語に円滑に訳すこと」、および項目9「英語の文法に精通すること」において有意に「積極的」群の点数が高かった。

表6. 「卒業までに身に付けたい英語能力」の各項目の消極的・積極的グループ別の  
 平均値・標準偏差とマン・ホイットニーのU検定の結果

項目	消極的(N = 16)		積極的(N = 36)		マン・ホイットニーのU
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	3.00	0.97	3.44	0.65	215.00
2	2.81	0.75	3.22	0.80	201.00
3	2.25	1.06	3.06	0.86	165.00 *
4	2.63	0.62	3.17	0.82	168.00 *
5	1.88	0.72	2.28	0.85	218.00
6	1.81	0.98	2.33	0.93	196.50
7	2.56	0.96	3.19	0.79	182.00 *
8	2.69	1.01	2.92	0.91	253.50
9	1.75	0.86	2.81	0.86	120.00 **
10	2.31	1.14	2.86	1.02	208.00
11	2.69	0.95	2.89	0.67	256.00

\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$

さらに、「受講したい英語の授業」において「消極的」群と「積極的」群においてどのように異なるかを調べるため、各項目についてマン・ホイットニーのU検定(有意水準5%)を行った。その結果は表7の通りである。項目1「TOEICテスト対策」、項目2「TOFELテスト対策」、項目3「英検テスト(準2級)対策」、項目4「英語のネイティブスピーカーによるクラス」、項目6「文法をしっかりと教えてくれる授業」、項目7「読解のコツを教えてくれる授業」、項目10「海外の保育園や小学校での実習を行う」、項目14「日本国内での英語村(すべてのスタッフが英国人)のようなところでの語学研修」、項目15「英語のネイティブスピーカーといつでも会話できるようなラウンジ」において有意に「積極的」群の点数が高かった。

表7. 「受講したい英語の授業」の各項目の消極的・積極的グループ別の平均値・標準偏差とマン・ホイットニーのU検定の結果

項目	消極的(N = 16)		積極的(N = 36)		マン・ホイットニーのU
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	1.75	0.77	2.58	0.97	151.50 **
2	1.69	0.70	2.42	0.94	163.00 *
3	1.69	0.95	2.31	0.92	181.50 *
4	2.00	0.82	2.69	0.89	163.50 *
5	2.44	0.96	2.67	0.86	244.50
6	2.38	0.72	2.92	0.84	186.00 *
7	2.69	0.60	3.14	0.76	179.00 *
8	2.56	0.81	3.03	0.77	198.00
9	3.33	0.72	3.00	0.89	216.50

項目	消極的(N = 16)		積極的(N = 36)		マン・ホイットニーのU
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
10	2.31	1.08	3.03	1.03	184.00 *
11	1.63	1.02	2.35	0.98	203.00
12	2.00	0.82	2.62	0.92	234.50
13	2.20	0.94	2.63	0.94	185.50
14	1.63	1.02	2.12	1.04	156.00 *
15	2.00	0.82	2.42	0.93	164.50 *
16	2.20	0.94	2.50	0.95	199.50

\*  $p < .05$ . \*\*  $p < .01$

「子どもに関する英語の授業」において「消極的」群と「積極的」群においてどのように異なるかを調べるため、各項目についてマン・ホイットニーのU検定(有意水準5%)を行った結果、すべての項目において有意な差は見られなかった(表8を参照)。

表8. 「子どもに関する英語の授業」の各項目の消極的・積極的グループ別の平均値・標準偏差とマン・ホイットニーのU検定の結果

項目	消極的(N=13)		積極的(N=29)		マン・ホイットニーのU
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	
1	2.62	0.77	2.55	0.91	185.50
2	2.38	0.87	2.69	0.85	153.50
3	2.08	0.95	2.52	0.91	133.50
4	2.00	0.91	2.28	0.80	159.50
5	3.08	0.95	2.90	0.86	163.00
6	3.00	1.00	3.07	0.88	183.50
7	2.54	0.97	2.59	0.82	185.50
8	2.62	1.04	2.69	0.89	179.00
9	1.92	0.86	2.24	0.87	154.50
10	1.92	0.95	2.21	0.94	155.00
11	2.08	1.12	2.14	0.95	177.00
12	2.25	0.87	2.24	0.87	168.00

### 受講したい授業および学びたい英語

「どのような英語の授業が受けたいか・どのような英語を学びたいか」に対する回答記述をいくつかのグループに分類し、以下にいくつかの回答例を示した。この結果から量的なデータだけから見出すことができない学習者のニーズを読み取るのが目的である。なお、考察において量的データの結果と回答記述式項目の記述を比較し論じていく。

1. 「どのような英語の授業が受けたいか・どのような英語を学びたいか」

- (1) 英会話に関すること 8名  
回答例
- 日常で使えるような英会話を中心に学習したい
  - 英語が話せるようになる授業を受講したい
- (2) 文法に関すること 10名  
回答例
- 基礎から文法をやりなおしたい
  - とにかく英語がものすごく苦手なので基礎の文法や単語・イディオムなどをたくさん覚えて英語力を高めたい
  - 基礎から丁寧に教えてもらいたい
  - 子どもに英語を教える前にまずは自分達の基礎学力をつけるべきだと思ふ
- (3) 海外に関すること 10名  
回答例
- 海外の保育園での実習を行ってみたい
  - 留学をしたい
  - 外国の子どもと交流したい
- (4) 試験対策に関すること 3名  
回答例
- TOEIC対策を行ってほしい
  - TOFEL対策を行ってほしい

2. 「保育士になるためにどのような英語を大学で学びたいか」に対する回答

回答例

- 簡単な英語を覚えられるような歌を覚えたい 10名
- 保育園や幼稚園で行える英語での簡単なゲーム 7名
- 子ども用の映画を使った授業 3名
- 子どもに話しかける英語 3名
- 外国人の保護者と話すための英語 3名
- 英語の紙芝居の作成 3名
- 子ども用の英語の読み物 3名
- 外国の子どもの遊びを日本の子どもたちに紹介したい 2名
- 日本文化を外国の子どもに教える 2名

考察

本節では以上のデータ分析で得られた結果を、先に設定した研究課題に即しながらまとめる。

研究課題1:保育士養成課程の学生はどのような英語学習のスタイルや好みを持っているのか。また、英語学習のスタイルや好みによってどのようなグループに分類することができるのか。

表1に示した $\chi^2$ 検定の結果から、「あてはまる」が有意に多かった項目は、項目2「授業中、ひとりで(ペアやグループではなく)学習すると学習がはかどる」、項目4「授

業が教科書にきちんとそっているとよく学習できる」、項目6「先生が日本語で説明をしてくれるとよく学習できる」、項目7「先生がすぐに私の誤りを正しく直してくれるとよい」、項目9「先生が教室を歩き回り、一人一人生徒に指導してくれるのがよい」、項目10「翻訳の練習はためになる」、項目11「言葉をただ耳で聞くだけでなく目で見ると勉強になる」、項目12「ビデオやDVDなどを使って勉強するのが好きだ」、項目18「可能な限り、よい成績をとることは重要だ」であり、「あてはまらない」が有意に多かった項目は、項目3「先生が厳しく授業をしてくれるとよい」、項目8「コンピュータやインターネットを使って英語を勉強することに興味がある」、項目14「英語の宿題を出してくれたほうがよい」、項目15「他の学習者・学生と英語で話すのが好きだ」であった。

以上の結果から、本研究参加者の学習スタイル及び好みを以下のように推測することができる。

- ・「ひとりで学習するとはかどる」と感じており、「他の学習者・学生と英語で話す」のを好まない。
- ・「言葉をただ耳で聞くだけでなく目で見ると勉強になる」と考えており、文字に頼る傾向がある。
- ・「授業が教科書にきちんとそっているとよく学習できる」「先生が教室を歩き回り、一人一人生徒に指導してくれるのがよい」「先生がすぐに私の誤りを正しく直してくれるとよい」など教員からきめ細かい指導を受けたいと望んでいる一方で、「授業で厳しくされる」ことや「宿題が出されること」は望んでいない。
- ・「ビデオやDVDなどを使って勉強する」などを好む一方で、「コンピュータやインターネットを使って英語を勉強する」方法は嫌がる傾向にある。
- ・教員が「日本語で説明をしてくれる」ことを望んでいる。

鈴木・熊澤(2006)は、高校生1143名にピリーの調査を行った結果、調査対象者は英語の授業において日本語での説明を望んでいることを明らかにしているが、本研究においても、参加者は日本語での説明を望んでいたことがわかった。

また、クラスター分析により2つのグループに弁別し、その2つのグループをマン・ホイットニーのU検定により分類した結果(表5を参照)、項目17「英語の授業の単位を落とすしてしまうか心配である」のみ有意に点数が高い「消極的群」と項目3「先生が厳しく授業をしてくれるとよい」、項目16「海外に長期留学したいと思っている」、項目8「コンピュータやインターネットを使って英語を勉強することに興味がある」などの項目において有意に点数が高い「積極的群」の二つに分類された。

研究課題2: 保育士養成課程の学生はどのような英語の能力を身につけたいと思っているのか。また、それらはグループごとにどのように異なるのか。

$\chi^2$ 検定の結果(表2)から「あてはまる」が有意に多かった項目は、項目1「海外へ行ったとき、英語で様々な日常の状況に対処すること」、項目2「英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること」、項目3「英語の本や雑誌や新聞などを読むこと」、項目4「英語の単語やイディオムをたくさん覚えること」、項目7「英語を日本語に円滑に訳すこと」、項目11「英語のすばらしい発音を身に付けること」であり、一方、「あてはまらない」が有意に多かった項目は項目5「英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること」、項目6「英語の専門書や論文を速く効果的に読むこと」であった。

以上の結果より、本研究に参加した保育士養成課程の学生は英語で様々な日常

的狀況に対処することができる英語力を身につけたいと思っていることがわかる。早坂(1995)およびEdwards(1995)においても、同様の項目(海外へ行ったとき、英語で様々な日常状況に対処すること)が最も平均値が高かったことから、専攻や学部に関係なく、日常生活の英会話というものに大学生の関心が高いことがわかる。また、回答記述式の回答にも、「日常で使えるような英会話を中心に学習したい」や「英語が話せるようになる授業を受講したい」などの意見が多く見られたことから、授業に日常生活に関する英会話を取り入れていく必要があるであろう。その際、研究課題1の結果を考慮すると、日本語での説明を行い、学生の英語の誤りはその場で直してあげ、また、あまり学生同士のコミュニケーションを望んでいないことから、ペアワークだけでなく、テキストを各自が読み、問題を解くなど一人で学習できる活動を適宜取り入れていくことを示唆できるであろう。

その他、本研究に参加した学生は「英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること」、「英語の本や雑誌や新聞などを読むこと」、「英語の単語やイディオムをたくさん覚えること」、「英語を日本語に円滑に訳すこと」、「英語のすばらしい発音を身に付けること」を望んでいるが、「英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること」や「英語の専門書や論文を速く効果的に読むこと」は好まない傾向にあることが明らかになった。

さらに、グループ別に調べた結果(表6を参照)、項目3「英語の本や雑誌や新聞などを読むこと」、項目4「英語の単語やイディオムをたくさん覚えること」、項目7「英語を日本語に円滑に訳すこと」、項目9「英語の文法に精通すること」において「積極的」群の点数が有意に高かった。「積極的」群は「英語の本や雑誌や新聞などを読むこと」、「英語の単語やイディオムをたくさん覚えること」、「英語を日本語に円滑に訳すこと」、「英語の文法に精通すること」など伝統的な文法訳読法や単語やイディオムを覚えていくことを好む傾向があるが、「消極的」群は文法訳読法や暗記することを好まない傾向があるようである。ゆえに、「消極的」群が多いクラスでは文法や読解の授業よりも、旅行や日常生活に関する英会話の授業を行ったり、映画・テレビ・歌などの生教材を授業のなかに積極的に取り入れていくことを提案できる。

研究課題3: 保育士養成課程の学生はどのような英語の授業を受講したいと思っているのか。また、それらはグループごとにどのように異なるのか。

「あてはまる」が有意に多かった項目は、項目6「文法をしっかり教えてくれる授業」、項目7「読解のコツを教えてくれる授業」、項目8「リスニングのコツを教えてくれる授業」、項目9「映画やテレビ番組などを使った授業」、項目12「英語の歌で英語を学ぶ」であり、「あてはまらない」が有意に多かった項目は、項目2「TOFELテスト対策」、項目14「日本国内での英語村のようなところでの語学研修」であった(表3参照)。

先に示した通り研究課題1および2においても、英語の映画・テレビ番組・DVD・ビデオを利用した授業を好む傾向があることが明らかになったが、研究課題3についても多くの学生が「映画やテレビ番組などを使った授業」を望んでいた。これらのことから、本研究に参加した学生は映画やテレビ番組といった映像媒体を使った授業を好む傾向があることがわかる。その他、「リスニングのコツを教えてくれる授業」、「文法をしっかり教えてくれる授業」、「読解のコツを教えてくれる授業」、「英語の歌で



英語を学ぶ」を望んでいることが明らかになった。さらに、回答記述式項目の結果においても文法を基礎からやりなおしたいという意見が多くみられたことから、本研究に参加した学生が文法をしっかりと学び直したいと感じていることがわかる。

グループ別に調べた結果、項目1「TOEICテスト対策」、項目2「TOFELテスト対策」、項目3「英検テスト(準2級)対策」において「積極的」群の点数が有意に高かった(表7参照)。回答記述式項目にも3名の学生がテスト対策の授業を行ってほしいという意見を記述しており、「積極的」群の一部の学生がテスト対策の授業を望んでいることがわかる。その他「積極的」群のほうが有意に点数の高かった項目は(表7参照)、項目4「英語のネイティブスピーカによるクラス」、項目6「文法をしっかりと教えてくれる授業」、項目7「読解のコツを教えてくれる授業」、項目10「海外の保育園や小学校での実習を行う」、項目14「日本国内での英語村(すべてのスタッフが英国人)のようなどころでの語学研修」、項目15「英語のネイティブスピーカといつでも会話できるようなラウンジ」であった。以上のことより、積極的に英語を学習したいと思っている学生とあまり英語を学習したくないと思っている学生との間で受講したい英語のクラスがかなり異なることがわかる。「積極的」群の学生は、文法や読解の授業やTOEIC、TOEFL、英検などの試験対策の授業を望む傾向にあるが、「消極的」群の学生はそのような授業を望まないことがわかる。また、「積極的」群の学生は「英語のネイティブスピーカによるクラス」「海外の保育園や小学校での実習を行う」「日本国内での英語村(すべてのスタッフが英国人)のようなどころでの語学研修」「英語のネイティブスピーカといつでも会話できるようなラウンジ」など授業および授業以外で積極的に英語母語話者と英語を使える機会を持ちたいと望んでいることがわかる。一方で「消極的」群の学生は、上述したような積極的に英語を使う環境を望んでいないことがわかる。

上記の結果より保育士養成課程においてどのような英語の授業を行うべきかについて、以下のような示唆が得られると思われる。必修科目においては全体のニーズを考慮して、映画やテレビ番組などの映像媒体や英語の歌を積極的に授業に取り入れていくべきであろう。また、受講したい授業において「消極的」群と「積極的」群の2つのグループにかなりの差が見られたことから、選択科目においては、英語の母語話者と接する機会を与える授業や試験対策を行うなど「積極的」群の学生の意欲に答えられるような授業を行うべきである。回答記述式項目においても10名が海外での実習や外国の子どもたちとの交流をしたいと記述していることから、海外での保育実習のような海外研修プログラムを積極的に取り入れて、希望者が受講できるようにしていく必要があるであろう。

研究課題4: 保育士養成課程の学生は子どもに関係するどのような英語の授業を受講したいと思っているのか。また、それらはグループごとにどのように異なるのか。

$\chi^2$ 検定の結果(表4)から「あてはまる」が有意に多かった項目は、項目5「子ども用の英語の歌をたくさん歌ってみたい」、項目6「子ども用の映画を使った授業を行ってほしい」であり、「あてはまらない」が有意に多かった項目は、項目9「英語で折り紙のおりかたを指導してみたい」、項目10「英語でお絵かきの指導を行ってみたい」、項目11「英語で工作の指導を行ってみたい」であった。以上のことから、本研究に参加した学生は子ども用の歌を歌ったり、映画を使った授業を望んでいるが、英語で何かを作ったりする指導は望んでいないことがわかる。以上のことから、保育士養成課程の英

語の授業に子ども用の映画や歌などを積極的に取り入れていくことを提案できる。なお、マン・ホイットニーのU検定を行った結果、どの項目においても「消極的」群と「積極的」群において有意な差は見られなかった(表8参照)。

さらに、「保育士になるためにどのような英語を大学で学びたいか」に対する回答記述式項目の回答において、10名が「簡単な英語を覚えられるような歌を覚えたい」、7名が「保育所や幼稚園で行える英語での簡単なゲーム」と記述している一方で、「外国人の保護者と話すための英語」と記述したのは3名であった。これらのことから、本研究に参加した学生は子どもに関する英語を学ぶことには関心はあるが、外国人の保護者と英語で話す必要性をあまり感じていないのではないかということが推測できる。しかし、Tsuchimochi(2004)はなぜ看護師に英語が必要なのか、どのような英語の表現が必要なのかを授業の中で具体的に示すことによって、学生の英語学習に対する動機づけが高められたことを報告している。ゆえに、保育士養成課程においてもTsuchimochiが行ったように、授業の中で保育士としてどのような状況でどのような英語が必要であるのかに随時触れ、学生の意識を高めていく必要があるであろう。

日本保育協会(2002)の調査によると、保育園1か所あたりの平均外国人児童数は公立が9.3名、私立が7.3名、とくに都区部・指定都市では、公立が12.2名、私立が12.8名であった。さらに、言語的な問題から生じる外国人児童の保護者とのコミュニケーションの難しさを大きな課題としてあげていた。このようなことに対処するため、自治体によっては保育所案内、ハンドブック、パンフレット、おたより、入所承諾書、家庭調査票、健康診断票)などの資料や書類を外国語で作成したり、外国人保育研修を実施したり、保育者用の英語やポルトガル語などの外国語会話集を作成し配布している。このような現状を踏まえ、保育士養成課程においても外国人児童の保護者とのコミュニケーションに英語が必要であることを新宿区など外国人児童が多い保育の現場の実状をあげながら学生に理解させる必要があるであろう。

### 本研究の限界および今後の課題

本研究の限界点および今後の課題として、以下の2点を指摘しておく。第一に、本研究は東京にある私立の大学1校よりデータを集めたものであり、調査協力者が52名と少ないことから、本結果を一般化することはできない。また、本研究の調査対象は東京の私立大学であることから、同様の調査を地方の大学で行った場合、結果がかなり異なる可能性もある。今後は広い地域から複数の大学の保育士養成課程の学生のデータを集め分析するなど、結果の一般化可能性を高める必要がある。

第2に、ニーズ分析は多角的な角度から調査を行う必要があるが(Long, 2005)、本研究は学生のニーズにのみ焦点をあてた調査であり、学生からだけのデータのみであるという点が限界点としてあげられる。保育士養成課程におけるESPカリキュラム開発には、教育行政官、保育士、保護者などさまざまな関係者すなわちディスコース・コミュニティのニーズを調査する必要がある。

### 結論

保育士養成課程におけるESPを取り入れたカリキュラムを開発するために、保育士養成課程の学生が英語教育に対してどのような要望や態度を持っているのかを調査した。その結果、本研究に参加した学生は日本語での授業を望んでおり、学生同士で英語を話すようなコミュニケーション活動をあまり好まない傾向にあった。また、

誤りをすぐに直してくれることを望んでいるが、一方で、 厳しい授業や課題が多い授業は望んでいないことが明らかになった。身につけたいと思っている英語の能力においては、多くの学生が海外に行ったときに困らない英語力を身につけたいと思っており、映画やテレビ番組などを使った授業や読解やリスニングのコツを教えてくれる授業を受講したいと思っているようである。さらに、子どもに関係する映画や歌などに興味があることも明らかになった。

また、「消極的」群と「積極的」群の2つのグループに分けた結果、受講したいと思う英語の授業において2つのグループ間にかなりの差がみられた。特に、英語母語話者と英語でコミュニケーションを行う授業や海外での保育園実習、また試験対策の授業などでその差が顕著であった。

今回の学生のニーズ分析の結果を保育士養成課程におけるESPを考慮したカリキュラム作成にいかしていくとすれば、子どもに関係する英語の映画や歌を取り入れた授業や日常生活の英会話を必修科目として行い、英語母語話者とのコミュニケーションを行う授業や海外の保育園や小学校での実習を行う授業などを選択の科目として行うことを提案できる。

また、保育士養成課程の学生の中には、保育士が外国人児童の保護者とのコミュニケーションの場などで英語が必要であるということを認識していない学生も多いと思われる。ゆえに、今回のニーズ分析の結果から、学生は日常生活の英会話に興味があることが明らかになったため、日常生活の英会話を学習しながら、その中にディスコース・コミュニティーで必要とされる外国人児童の保護者とのコミュニケーション場面での会話も取り入れるなど、ESP的な要素を授業の中に工夫して取り入れていくことを示唆できるであろう。

## 引用文献

- Brown, J. D. (1994). *Elements of language curriculum*. Boston: Heinle & Heinle.
- Dörnyei, Z. (2003). *Questionnaires in second language research: Construction, administration and processing*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Edwards, C. J. (1995). English literature major comparison, and factor analysis: A study on students' perceived EFL needs: Part 2: Liberal arts major results. 『北海道武蔵女子短期大学紀要』27, 19-50.
- Halvorsen, J. (1998). A student needs analysis survey at a Japanese junior college and implications for curriculum design, *The Bulletin of Kokugakuin Junior College*, 16, 105-151.
- Kikuchi, K. (2005). Student and teacher perceptions of learning needs: A cross analysis. *Shiken JALT Testing & Evaluation SIG Newsletter*, 9, 8-20.
- Long, M. H. (2005). Overview: A rationale for needs analysis and needs analysis research. In M. H. Long (Ed.), *Second language needs analysis* (pp. 1-16). Cambridge: Cambridge University Press.

- Long, M. H. (2005). Methodological issues in learner needs analysis. In M. H. Long (Ed.), *Second language needs analysis* (pp. 19-76). Cambridge: Cambridge University Press.
- Richards, J. C. (2001). *Curriculum development in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tsuhimochi, K. (2004). Motivational strategies for teaching nursing English to the lower level students. *Bulletin of the Kagoshima Prefectural Jr. College Cultural and Social Science*, 55, 1-15.
- カレイラ松崎順子(2008).「English for Specific Purposes(ESP)を取り入れた英語カリキュラム開発のための学生に対するニーズ調査—保育専攻と心理専攻の類似点および相違点—」『東京未来大学紀要』1, 77-87.
- 橋口美紀・坂本育生(2003).「体育専攻生のための英語教育(ESP)をめざして: 1, 2年生のニーズ調査から」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』13, 99-106.
- 橋本光憲(2000).『経営学部のESP 深山晶子(編) ESPの理論と実践』東京:三修社 pp.165-171.
- 早坂慶子(1995).「北海道における大学英語教育のニーズ分析—北星学園大学の場合—」,『北星学園大学文学部北星論集』32, 67-91, 204-205.
- 日本保育協会(2002).『保育の国際化に関する調査研究』([http://www.nippo.or.jp/cyosa/02/02\\_ta.html](http://www.nippo.or.jp/cyosa/02/02_ta.html)), (参照2008-11-6)
- 本岡直子・川崎裕美(1999).「大学英語教育におけるESP(English for Specific Purposes): 看護教育課程における学生の英語学習に対する意識の変化について」『広島県立保健福祉短期大学紀要』4, 25-33.
- 堀口和久(2003).「ESPと経済英語・ビジネス英語—大学英語教育の観点から—」『帝京大学文学部紀要教育学』28, 145-164.
- 神前陽子(2000).「薬学部のESP」深山晶子(編)『ESPの理論と実践』東京:三修社 pp.144-150.
- 深山晶子(2000).「工学部のESP」深山晶子(編)『ESPの理論と実践』東京:三修社 pp.151-157.
- 深山晶子編(2000).『ESPの理論と実践』東京:三修社.
- 堀口和久(2003).「ESPと経済英語・ビジネス英語—大学英語教育の観点から—」『帝京大学文学部紀要教育学』28, 145-164.
- 森田和子(1995).「保育科の英語教材として見る「保育現場」(I): 教材開発」『横浜女子短期大学研究紀要』10, 81-98.
- 森田和子(1997).「保育科の英語教材として見る「保育現場」(II): 授業実践」『横浜女子短期大学研究紀要』12, 35-54.
- 大須賀直子(2006).「保育者養成校におけるESPアプローチの実践とその効果の検証」『秋草学園短期大学紀要』23, 1-14.
- 笹島 茂(2000).「医学部のESP」深山晶子(編)『ESPの理論と実践』東京:三修社 pp.138-143.
- 寺内 一(2005).『ビジネス系大学の英語教育イノベーション—ESPの視点から』東京:白桃書房.
- 山崎敦子(2000).「理学部のESP」深山晶子(編)『ESPの理論と実践』東京:三修社 pp.157-164.
- 吉田研作・柳瀬和明(2003).『日本語を活かした英語授業のすすめ』東京:大修館書店.
- 吉田翠(2000).「看護栄養学部のESP」深山晶子(編)『ESPの理論と実践』東京:三修社 pp.131-138.

## 付録

## 保育士養成課程の学生の英語学習に対するニーズ調査に使用した質問紙

1. 「英語学習に対する学習スタイルと好み」の質問紙
  1. 他の学習者とペアを組んだり, 3-4人のグループで勉強するのが好きだ
  2. 授業中, ひとりで(ペアやグループではなく)学習すると学習がはかどる
  3. 先生が厳しく授業をしてけるとよい
  4. 授業が教科書にきちんとそっているとよく学習できる
  5. 先生がテストをしてくれたり, 宿題を出してくれるとよく学習できる
  6. 先生が日本語で説明をしてけるとよく学習できる
  7. 先生がすぐに私の誤りを正しく直してくれるとよい
  8. コンピュータやインターネットを使って英語を勉強することに興味がある
  9. 先生が教室を歩き回り, 一人一人生徒に指導してくれるのがよい
  10. 翻訳の練習はためになる
  11. 言葉をただ耳で聞くだけでなく目で見ると勉強になる
  12. ビデオやDVDなどを使って勉強するのが好きだ
  13. 自分のライティング(筆記の)課題をお互いに直しあうと勉強になる
  14. 英語の宿題を出してくれたほうがいい
  15. 他の学習者・学生と英語で話すのが好きだ
  16. 海外に長期留学したいと思っている
  17. 英語の授業の単位を落としてしまうか心配である
  18. 可能な限り, よい成績をとることは重要だ
2. 「卒業までに身に付けたい英語能力」の質問紙
  1. 海外へ行ったとき, 英語で様々な日常的状況に対処すること
  2. 英語の映画やテレビ・ラジオ番組や歌などを理解すること
  3. 英語の本や雑誌や新聞などを読むこと
  4. 英語の単語やイディオムをたくさん覚えること
  5. 英語で学問的または専門技術的な講義を理解すること
  6. 英語の専門書や論文を速く効果的に読むこと
  7. 英語を日本語に円滑に訳すこと
  8. 英語で自分自身の考えや感情について話すこと
  9. 英語の文法に精通すること
  10. 英語でe-mail/手紙を読んだり書いたりすること
  11. 英語のすばらしい発音を身に付けること

## 3. 「受講したい英語の授業」の質問紙

1. TOEICテスト対策
2. TOFELテスト対策
3. 英検テスト(準2級)対策
4. 英語のネイティブスピーカによるクラス
5. 海外の学生との交流プロジェクト
6. 文法をしっかりと教えてくれる授業
7. 読解のコツを教えてくれる授業
8. リスニングのコツを教えてくれる授業
9. 映画やテレビ番組などを使った授業
10. 海外の保育園や小学校での実習を行う
11. 海外の大学への短期留学(2週間程度)
12. 英語の歌で英語を学ぶ
13. 多読(簡単な英語の本をたくさん読む)の授業
14. 日本国内での英語村(すべてのスタッフが英国人)のようなところでの語学研修
15. 英語のネイティブスピーカといつでも会話できるようなラウンジ
16. コンピュータを利用した自学自習時間

## 4 「子どもに関係する英語」の質問紙

1. 英語の紙芝居を作ってみたい
2. 子ども用の童話の英語の読み聞かせを幼稚園や保育園でやりたい
3. 保育園や幼稚園で英語を指導する実習を行ってみたい
4. 英語で人形劇をやってみたい
5. 子ども用の英語の歌をたくさん歌ってみたい
6. 子ども用の映画を使った授業を行ってほしい
7. 子どもたちに英語の歌を教えてみたい
8. 子どもたちに英語ゲームの指導してみたい
9. 英語で折り紙のおりかたを指導してみたい
10. 英語でお絵かきの指導を行ってみたい
11. 英語で工作の指導を行ってみたい
12. 英語で運動やお遊戯の指導を行ってみたい